現代英語における「rather than + 原形不定詞／動名詞」構文について
‘Rather than *do/doing*’ in Present-day English

末　松　信　子・田　島　松　二*

＊　九州大学名誉教授

I

「Bより（も）むしろA」を意味する成句‘A rather than B’のAとBには文法上等しい名詞、形容詞、副詞、動詞や句、節がくる。様々な形態が起こりうる動詞の例で見てみると、

(a) They were screaming *rather than* singing.
(b) She telephoned *rather than* wrote.
(c) He wanted to sunbathe *rather than* (to) swim. (Quirk et al., 1985, §14.15より）

の如くである。このように rather than の後に動詞がくる場合、時制や数で主動詞の形に合わせるのが基本であるが、原形不定詞や動名詞がくることもある。簡略化して示すと次のような構文である。

(d) Tom watched TV *rather than* study/studying.

さらには rather than Bが文頭に来ることもあれば、主語と主動詞の間に起こることもある。

(e) *Rather than* study/studying, Tom watched TV.
(f) Tom, *rather than* study/studying, watched TV.

A か B かといった単なる「言葉の選択」ではなく、主語による「行為･行動の選択」を表す場合、A と B に起こる動詞が文法上対等な時制、数の形を取らず、上例 (d)~(f) に示したように、rather thanの後に原形不定詞か動名詞がくることがある。そのような構造が、現代の英語では実際にどの程度見られるのか。Rather than の後にくる動詞形は原形不定詞と動名詞のどちらがより一般的なのか。また、rather than B の前置はどの程度起こるのか。その前置された rather than の後にくる原形不定詞と動名詞ではどちらが普通なのか。このような疑問に具体的に答えてくれる先行研究はないようである。小論では、こういった問題を, 主として2000年前後以降刊行された英米のフィクションやエッセイから収集した用例に基づいて検討したいと思う。

II

本論に入る前に、「Bより（も）むしろA」を意味する'A rather than B'型構文が、単に文法上対等な関係にある「言葉の選択」を表すのではなくて、主語による「行為・行動の選択」を表す場合、rather than に後続する動詞の形は原形不定詞か動名詞か、また、'rather than B, A'のように、rather than の前置は可能か、といった問題に関する辞書、語法書、文法書等の見解を見てみよう。

Rather than の後に原形不定詞や動名詞がくる構文は、歴史的にはいつ頃使われるようになったのかは不詳である。歴史的大辞典である OED (1933, 1989[2], s. v. Rather, *adv*. 9. a.) に記録されている原形不定詞の最古の例は19世紀後半(1885) のものであり、動名詞の例は皆無である。Curme (1931, p. 480) も原形不定詞の、それも文頭に来る例を19世紀中ごろのThackerayの作品 (1848－50) から1例引用しているが、動名詞の用法にはふれていない。Jespersen は*Modern English Grammar,* V (1940, §§12.5.3~4) で原形不定詞がくる構造をやや詳しく論じ、19世紀中頃から20世紀初頭の例を幾つか挙げている。文頭に来る例も同じく数例挙げているが、そのうちの最古の2例はそれぞれ17世紀中頃と18世紀中頃のものである。これら数少ない先行研究からわかることは、「rather than＋原形不定詞」は早くも17世紀中頃に、それも前置の形式で起こり、19世紀には散見されるようになっていることである。しかし、動名詞を従える rather than の歴史については実例も知見も得られなかった。

比較的最近の辞書、語法書、文法書等では、'A rather than B'のA, Bは文法上対等な語句であることが基本形であるせいか、小論で問題にしている A, Bが動詞の場合に関しては全くふれていないものも多い。[1] ふれているものも、大半は rather than の後には原形不定詞と動名詞の両方が使われること、rather thanは前置が可能であることに簡単にふれ、２、３、例を挙げているだけであり、両形の頻度の多寡などへの言及は皆無である。文法書では Quirk et al. (1985), Alexander (1988), Biber et al. (1999) など, 語法書では Peters (2004), Swan (2016[4]) などである。その中には、rather than が'instead of'の意を表す場合は動名詞が用いられるとか、[2] その場合しばしば文頭にくるといった説明を付しているものもある。[3] とりわけ、*American Heritage Guide* (2005) は than が本来接続詞であることから、rather than の後の動名詞使用に反対する者もあるが、文法的にも'defensible'であり、文体的にも'commendable'な構文である、と擁護している。これらの多数意見に対して、動名詞にはふれず、rather than の後には原形不定詞がくることに注意を促したり、[4] コメントなしに、文頭に起こる原形不定詞の例を挙げただけのものもある。[5] わが国の文献も、海外のもの同様、全くふれていないもの、原形不定詞の例だけを挙げたもの、原形不定詞と動名詞の両方を例示したものがある。Rather than が文頭、つまり前置された場合にもふれ、その場合動名詞を用いる傾向があるとか、[6] 動名詞のみ可能といったコメントも見られる。[7]

---

1) 例えば、やや古いものでBryant (1962), Copperud (1970), Mager & Mager (1993[2]), 最近のものではGreenbaum & Whitcut (1988), Cartor & McCarthy (2006), Aarts (2011) など、辞書ではWeb.3 (1976）など参照。
2) Fowler 4 (2015) 参照。
3) WDEU (1989) 参照。
4) Follett (1966, p. 257) 参照。
5) UED (1961 [1932[1]]), LDCE (2014[6]), Huddleston & Pullum (2002）参照。
6) 『ジーニアス英和辞典』（2022[6]）
7) 小西編『現代英語語法辞典』（2006)

以上のことからわかることは、行動・行為を表す2つの動詞を比較し、選択する「Bより（も）むしろA」の意を表す‘A rather than B’型構文においては、rather than の後の動詞形は原形不定詞と動名詞の両方が用いられること、rather than BがAに前置された‘rather than B, A’型構文も可能であり、その場合動名詞がくることが多いと特記するものもある、といったところである。原形不定詞、動名詞のどちらがより一般的か、rather than B の前置はどの程度普通か、その場合原形不定詞と動名詞のどちらがより一般的か、といったことなどは全くわからない。（先行研究を概観して感じたことであるが、関心の持ちようにもよるのであろうが、裏付けのない、主観的見解も多々あり、筆者らにはわかりにくい説明もあったことを付記しておきたい。）

III

主語による「行動・行為の選択」を表す‘A rather than B’型構文においては、rather thanの後にくる動詞形は、文法上、つまり時制、数ともに主文の動詞形に合わせるのが基本とされる。しかし現代英語では、原形不定詞や動名詞が起こる構文もしばしば見られ、加えて、rather than が前置されたものもある。その実態を探るのが小論の目的であるが、調査対象としたものは、一部エッセイを含むが、大半は、2000年前後以降刊行されたもので、*New York Times* や *USA Today* などのベストセラー・リストにしばしば登場するペーパーバックの小説類（ロマンス、ミステリー、スリラーなど）である。一般的な書き言葉を代表したものと考えてよいであろう。いわば無作為に選んだものであり、英米のテキスト数が同じとかでもなく、この数年の読書の過程で気付いた用例を収集したものである。小説類は300から400頁前後のものが大半であったが、全く該当例のないテキストも多くあった。当然誤読、見落としもあろうが、筆者らが実際に収集した用例を、作者名のアルファベット順に、以下に示す。なお、rather than の後にくる動詞形のうち、原形不定詞はV, 動名詞はVingと表記する。表中、用例数の後の（　）内に挙げた数字は、rather thanが前置された数を示すが、星印 (*) を付したものは、主語と主動詞の間に起こる数である。

	V	**Ving**	Total
Albom, M., *Tuesdays with Morrie* (1997)	1 (1)	0	1 (1)
Archer, J., *Nothing Ventured* (2020)	0	1	1
——, *Over My Dead Body* (2021)	0	1	1
Bonasia, L. K., *Summer Shift* (2010)	3 (3)	0	3 (3)
Brown, D., *The Da Vinci Code* (2003)	1 (1)	6 (6)	7 (7)
Brown, S., *Sunset Embrace* (1985)	6 (5)	4 (3 + 1*)	10 (9)
——, *Another Dawn* (1985)	0	9 (8)	9 (8)
——, *Best Kept Secrets* (1989)	1 (1)	1 (1)	2 (2)
——, *Chill Factor* (2005)	4 (4)	3 (2)	7 (6)
Clark, M. H., *I Heard That Song Before* (2007)	3 (1 + 1*)	1 (1)	4 (3)

Connelly, M., *The Lincoln Lawyer* (2005)	2 (2)	0	2 (2)
Cook, Robin, *Marker* (2005)	3 (2)	1 (1)	4 (3)
——, *Crisis* (2006)	1 (1)	1	2 (1)
Cook, Thomas H., *Chatham School Affair* (1996)	1 (1)	2 (2)	3 (3)
Crichton, M., *Travels* (1988)	1 (1)	0	1 (1)
Crystal, D., *Words, Words, Words* (2006)	0	1 (1)	1 (1)
Davids, P., *A Military Match* (2020)	0	1 (1)	1 (1)
Deaver, J., *The Cold Moon* (2006)	1	1 (1)	2 (1)
Giffin, E., *Something Borrowed* (2004)	0	1	1
Haig, Matt, *Midnight Library* (2021)	0	1	1
Henry, Emily, *Beach Read* (2020)	0	1 (1)	1 (1)
Hoover, C., *Reminders of Him* (2022)	1	0	1
Howard, L., *Almost Forever* (1986)	4 (2)	0	4 (2)
——, *Heartbreaker* (1987)	2	2	4
——, *Open Season* (2002)	0	1	1
——, *Cry No More* (2004)	3 (1)	4	7 (1)
——, *Dying to Please* (2016)	3 (1)	1 (1)	4 (2)
King, S., *The Girl Who Loved* (2000)	0	2 (1)	2 (1)
Kleypas, L., *Seduce Me at Sunrise* (2008)	4 (2)	1 (1*)	5 (3)
Macomber, D., *16 Lighthouse Road* (2001)	6 (5)	0	6 (5)
——, *The Shop* (2004)	9 (5)	0	9 (5)
——, *Springtime Sunshine* (2022)	5 (5)	0	5 (5)
——, *The Best Is Yet to Come* (2023)	3 (2)	0	3 (2)
Nichols, J., *The Sterile Cuckoo* (1965)	2 (2)	0	2 (2)
Steel, D., *The Ghost* (1997)	3 (1)	1	4 (1)
——, *Toxic Brothers* (2005)	1	1	2
——, *Sisters* (2007)	0	1 (1)	1 (1)
Williams, P., *The Dictionary of Lost Words* (2022)	0	4 (3)	4 (3)
Wingate, L., *Before We Were Yours* (2018)	0	5 (2)	5 (2)
Winston, L., *Good Grief* (2005)	0	1	1
Total	74 (49+1*)	60 (37+2*)	134 (89)

文法上同等の名詞、形容詞、副詞、前置詞句、等々の語句の選択、つまり「言葉の選択」を表す'A rather than B'はごく一般的に見られる構文であるが、小論で問題にしている「行動･行為の選択」を表す'A rather than B'という構文は、どの作品でも頻繁に使われる表現というわけではないよう

である。実際、筆者らが調査した60テキストのうち、実例が見られたのは上表に示した40だけで、残りの20（小論末尾の参考文献参照）では皆無であった。上表中、D. Brown, S. Brown, L. Howard, L. Kleypas, D. Macomber, L. Wingate ら一部の作家は多少好んで用いているように思われるが、大半は1、2例しか使っていない。また用例はほとんど全て（129例）が地の文に起こり、会話文ではわずか5例だけであったことも予想外の、興味深い点であった。

まず、rather than の後に来る動詞形は、原形不定詞と動名詞ではどちらが多いかを見てみよう。全用例134のうち、原形不定詞は74（55.2％）、動名詞は60（44.8％）で、原形不定詞がやや多いが、どちらもほぼ同じように使われていると言えそうである。使用者別では、26人中7人が原形不定詞のみ、10人が動名詞だけを使い、残りの9人は両形を使っている。まさに三者三様といった感じである。なお、上表中、英国系の作家、作者は Archer, Crystal, Haig, Williams の４人だけであるが、いずれも動名詞だけを使っている。興味深い点ではあるが、イギリス英語に特有の語法であるかどうかは、データが少ないので残念ながら断定できない。一方、両方を使う作家が多いアメリカ系で、F. Macomber は4作品で23例、全て原形不定詞だけを使っていることも興味深い点であるが、個人的好みを反映しているのかもしれない。

次に、rather than の位置によって、原形不定詞と動名詞の使用頻度に違いがあるか見てみよう。その前に、それぞれの型に関して原形不定詞と動名詞の実例を1つずつ示す。

＜A rather than B型＞

(1) Jacqueline nodded *rather than* <u>respond</u> verbally.

(D. Macomber, *The Shop on the Blossom Street*, p. 219)

(2) Daisy hoped Mrs. Phipps was one who could see the long-term benefit, *rather than* <u>thinking</u> of only the rent money. (L. Howard, *Open Season*, p. 48)

これらの基本語順に対して、rather than Bが主動詞に先行する、つまり前位置にくる例が次のものである。

＜Rather than B, A型＞

(3) *Rather than* <u>tell</u> the jurors what evidence he would present and what it would prove, the prosecutor tried to tell them what it all meant. (M. Connelly, *The Lincoln Lawyer*, p. 317)

(4) *Rather than* <u>driving to the front door</u>, Langdon pulled into a parking area nestled in the evergreens.

(D. Brown, *The Da Vinci Code*, p. 244)

上例 (3), (4) のように、主動詞に対して前位置をとる場合、文頭が普通であるが、稀にrather than Bが主文の主語と動詞の間に起こる場合がある。手許の資料では全134例中3例（先の表中星印*を付したもの）だけであるが、そのうちの2例は次のものである。

(5) Was it possible that all his declarations of love were merely the calculations of a cold-blooded killer who, *rather than* take the chance of murdering me, married me instead?

(M. H. Clark, *I Heard That Song Before*, p. 256)

(6) The unexpected discovery that marriage, *rather than* weighting their relationship with seriousness, had somehow given life a sense of lightness, of buoyancy.

(L. Kleypas, *Seduce Me at Sunrise*, p. 358)

これら (5), (6) の例は、rather than B が主動詞に先行するという点では、文頭に位置する (3), (4) と同じであるので、以下‘rather than B, A’型として扱う。

では、‘A rather than B’という基本型と、rather than B が前置された‘rather than B, A’型では、原形不定詞、動名詞の使用に違いがあるかどうかを見てみよう。

	V	Ving	Total
A rather than B	24	21	45
	(53.3%)	(46.7%)	(100%)
Rather than B, A	50	39	89
	(56.2%)	(43.8%)	(100%)
Total	74	60	134
	(55.2%)	(44.8%)	(100%)

上表を見て、まず意外とも思われる結果は、基本型である‘A rather than B’の45例に対して、‘rather than B, A’型が89例と、約２倍の頻度で前置型が多いことである。しかし、これは D. Brown, S. Brown, D. Macomber といった一部の作家が特に前位置を好んで用いていることによるのかもしれない。作家別に見てみる。用例が1、2例しかない作家が多いので参考程度にすぎないが、基本型の‘A rather than B’型のみの使用は5人、rather than が前位置された‘rather than B, A’型のみは10人、両型使用は11人である。使用者数の点からも、両型使用者を含めると、前置型を用いる作家が多いという結果である。

では、rather than の位置によって原形不定詞と動名詞の使用に何らかの差異はあるのであろうか。まず基本型の‘A rather than B’型では、24対21で原形不定詞がやや多いといった程度で、特にどちらの語形が一般的であるとは言えない。Rather than B が主動詞に前置された‘rather than B, A’型の場合はどうか。前節（§2）で見たように、辞書、語法書の中には rather than が前置される場合は通常動名詞がくるとするものもあるが、上表では原形不定詞50例（56.2%）、動名詞39例（43.8%）であり、基本型の場合同様、ここでも原形不定詞がやや多く、一部の辞書、語法書の見解とは異なる結果を示している。

今回の調査では、基本型の‘A rather than B’よりも rather than が前置された‘rather than B, A’型が優勢であり、rather than の後にくる動詞の形はどちらの型においても、原形不定詞がやや優勢といったところであるが、動名詞もほぼ同じ程度に使われている。

IV

以上、「Bより（も）むしろA」を意味する‘A rather than B’という成句において、文法上等しい要素（語句）を選択する場合ではなくて、主語の「行動・行為」を表す動詞を選択する場合、rather than の後に、時制や数において、主動詞と一致する動詞形ではなくて、原形不定詞か動名詞がくる構造を取り上げ、現代英語、それも主として2000年前後以降に刊行された小説類を第一次資料として、この成句の実際の生起状況、生起位置、後続する動詞形を観察した。まとめると次のようになる。

この成句自体どこでも自由に使われるというわけではなく、主として地の文、つまり書き言葉で散見される表現であること、rather than の生起位置については、基本型である主動詞の後より、文頭（ごく稀に、主語と主動詞の間）に起こる例が倍近く見られること、また、rather than の後に来る動詞の形は、基本型である‘A rather than B’でも、rather than が前置された‘rather than B, A’型のどちらにおいても原形不定詞がやや多いが、動名詞もほぼ同じくらい使われていることが確認された。しかし、原形不定詞か動名詞のどちらか一方しか使わない作家もいれば、その両方を使う作家もあり、個人的好みが大きく関係しているようにも思われる語法である、というのが筆者らの印象である。

参考文献（小論で言及したもののみ）

第一次資料：

Albom, Mitch, *Tuesdays with Morrie.* New York: Doubleday, 1997.

Archer, Jeffrey, *Nothing Ventured*. London: Pan Books, 2020.

——, *Over My Dead Body*. London: HarperCollins, 2021.

Bonasia, Lyn Kiele, *Summer Shift*. New York: Simon & Schuster, 2010.

Brown, Dan, *The Da Vinci Code*. New York: Anchor Books, 2006 (2003[1]).

Brown, Sandra, *Sunset Embrace*. New York: Warner Books, 1990 (1985[1]).

——, *Another Dawn*. New York: Warner Books, 1991 (1985[1]).

——, *Best Kept Secrets*. New York: Warner Books, 1989.

——, *Chill Factor*. New York: Pocket Books, 2018 (2005[1])

Clark, Mary Higgins, *I Heard That Song Before*. New York: Pocket Books, 2007.

Connelly, Michael, *The Lincoln Lawyer*. New York & Boston: Warner Books, 2005.

Cook, Robin, *Marker*. New York: Putnam's Sons, 2005.

——, *Crisis*. New York: Putnam's Sons, 2006.

Cook, Thomas H., *The Chatham School Affair*. New York: Bantam Books, 1996.

Crichton, Michael, *Travels*. New York: Perennial/Harper Collins, 2002 (1988[1]).

Crystal, David, *Words, Words, Words*. Oxford: Oxford University Press, 2006.

Davids, Patricia, *A Military Match*. Toronto, Ontario: Harlequin, 2020.

Deaver, Jeffery., *The Cold Moon*. New York: Pocket Star Books, 2006.

Giffin, Emily, *Something Borrowed*. New York: St. Martin's Press, 2004.

Haig, Matt, *Midnight Library*. Edinburgh: Canongate Books, 2021.

Henry, Emily, *Beach Read*. Penguin Books, 2020.

Hoover, Colleen, *Reminders of Him*. Seattle, WA: Montlake, 2022.

Howard, Linda, *Almost Forever*. Don Mills, Ontario, Canada: Mira Books, 1986.

——, *Heartbreaker*. Don Mills, Ontario: Mira Books, 1987.

——, *Open Season*. New York: Pocket Books, 2002.

——, *Cry No More*. New York: Ballantine Books, 2004.

——, *Dying to Please*. New York: Ballantine Books, 2016.

King, Stephen, *The Girl Who Loved*. New York: Pocket Books, 2000.

Kleypas, Lisa, *Seduce Me at Sunrise*. New York: St. Martin's Press, 2008.

Macomber, Debbie, *16 Lighthouse Road*. Don Mills, Ontario: Mira Books, 2001.

——, *The Shop on the Blossom Street*. Don Mills, Ontario: Mira Books, 2004.

——, *Springtime Sunshine*. Toronto, Ontario: Mira Books, 2022.

——, *The Best Is Yet to Come*. New York: Ballantine Books, 2023.

Nichols, John, *The Sterile Cuckoo*. New York: W. W. Norton, 1996 (1965[1]).

Steel, Danielle. *The Ghost*. New York: Dell, 1997.

——, *Toxic Brothers*. New York: Dell, 2005.

——, *Sisters*. New York: Dell, 2007.

Williams, Pip, *The Dictionary of Lost Words*. London: Vintage, 2022.

Wingate, Lisa, *Before We Were Yours*. New York: Ballantine Books, 2018.

Winston, Lolly, *Good Grief*. New York: Warner Books, 2005.

＜用例なしテキスト（作者、タイトル、刊行年）＞

Ahern, Cecelia, *If You Could See Me Now* (2005), *Postscript* (2019); Grisham, John, *The Guardians* (2020), *Sooley* (2022); Hiaasen, Carl, *Skinny Dip* (2004); Macomber, D., *Denim and Diamonds* (2020); Owens, Delia, *Where the Crawdads Sing* (2018); Palmer, Diana, *Kiss Me, Cowboy* (2022), *Wyoming Homecoming* (2022); Phillips, Susan E., *It Had to Be You* (1994); Reid, Taylor Jenkins, *One True Loves* (2016); Ryan, Jennifer, *Chase Wilde Comes Home* (2022); Shreve, Anita, *The Weight of Water* (1997); Sparks, Nicholas, *A Walk to Remember* (2000), *Dreamland* (2022); Steel, Danielle, *Complications* (2022); Strout, Elizabeth, *Olive Kitteridge* (2008); Whitaker, Chris, *We Begin at the End* (2020): Wiesner, Melissa, *His Secret Daughter* (2023), Zevin, Gabrielle, *Tomorrow, Tomorrow, Tomorrow* (2023).

第二次資料：

Aarts, Bas, *Oxford Modern English Grammar*. Oxford: Oxford University Press, 2011.

Alexander, L. G., *Longman English Grammar*. London and New York: Longman, 1988.

American Heritage Guide = *The American Heritage Guide to Contemporary Usage and Style*. Boston & New York: Houghton Mifflin, 2005.

Biber, Douglas, et al., *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman, 1999.

Bryant, Margaret M., *Current American Usage*. New York: Funk & Wagnalls, 1962.

Carter & McCarthy = Carter, Ronald and Michael McCarthy, *Cambridge Grammar of English: A Comprehensive Guide*. Cambridge: Cambridge University Press, 2006.

COD = *The Concise Oxford Dictionary*, 4th ed. (1951). Oxford: Clarendon Press.

Copperud, Roy H., *American Usage: The Consensus*. New York: Van Nostrand Reinhold, 1970.

Curme, G. O., *Syntax*. Boston: D. H. Heath, 1931.

Follett, Wilson, *Modern American Usage*: *A Guide*. Ed. and completed by Jacques Barzun. New York: Hill & Wang, 1966.

Fowler 4 = Fowler's *Dictionary of Modern English Usage*. 4th edition, ed. Jeremy Butterfield. Oxford: Oxford University Press, 2015.

Greenbaum, S. and J. Whitcut, *Longman Guide to English Usage*. Harlow, Essex: Longman, 1988.

Huddleston, R. and G. K. Pullum, *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press, 2002.

Jespersen, Otto, *A Modern English Grammar on Historical Principles, V*. London: George Allen & Unwin, 1940.

LDCE = *Longman Dictionary of Contemporary English*, 6th ed. London: Longman, 2014.

Mager & Mager = Mager, N. H. and S. K. Mager, *Encyclopedic Dictionary of English Usage*. 2nd ed., revised by J. Domini. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1993.

OED = James A. H. Murray, et al. (eds.), *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford: Clarendon Press, 1989 [1933[1]].

Peters, Pam, *The Cambridge Guide to English Usage*. Cambridge: Cambridge University Press, 2004.

Quirk, R., et al., *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman, 1985.

Swan, Michel, *Practical English Usage*, 4th ed. Oxford: Oxford University Press, 2016.

UED = *The Universal Dictionary of the English Language*. London: Routledge & Kegan Paul, 1961 [1932[1]].

WDEU = *Webster's Dictionary of English Usage*. Springfield, MA: Merriam-Webster, 1989.

Webster 3 = Webster's Third New International Dictionary. Springfield, MA: G. & C. Merriam, 1976.

小西友七 (編)『現代英語語法辞典』三省堂, 2006.

『ジーニアス英和辞典』大修館書店, 2022[6].